

Title	Maloryの'The tale of the Morte Arthur'の言語について : Maloryの英語の成長と体系
Sub Title	The language of Winchester MS. Of Malory's Tale of the Morte Arthur : Growth and system of Malory's English
Author	小川, 繁司(Ogawa, Shigeji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1959
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.9, (1959. 12) ,p.115(36)- 130(21)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00090001-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Malory の ‘The Tale of the Morte Arthur’ の言語について

——Malory の英語の成長と体系——

小 川 繁 司

I

Eugène Vinaver 教授は、1947 年に出版した Winchester MS. の校訂本 *The Works of Sir Thomas Malory* の序文の中で次のように述べておられる。

“The most obvious merit of this text is that it brings us nearer to what Malory really wrote. Less obvious but no less vital is the fact that it enables us to see Malory’s work in the making——not as a single book such as Caxton produced under the spurious and totally unrepresentative title of *Le Morte Darthur*, but as a series of separate romances each representing a distinct stage in the author’s development from his first timid attempts at imaginative narrative to the consummate mastery of his last great books.” (Vinaver (ed.), Vol. I, Preface, p. vi)

Caxton が、一篇の長篇ロマンスと考えて *Le Morte Darthur* なる題名をつけて印刷し刊行したものは、じつは 8 篇の別個のロマンスを集めたものである⁽²⁾、という Vinaver 教授が出したこの新説に対しては、その後他の多くの学者達によつて、さまざまな角度からいろいろと批判が加えられてきている⁽³⁾。従つて、*Le Morte Darthur* が、はたして Vinaver 教授のいうように、全然別個のロマンスを集めた作品集であるのか、それとも Dichman 教授らがいうように、あとの発展を予想して逐次書き進めていつた作品の作品集なのか、という点については、いぜん問題が残るけれども、「各々の作品が Malory の作家としての発達段階を明瞭に示している」という事実については、議論の余地がないように思われる。Vinaver 教授のこの言葉を心に置いて、本論第Ⅱ節では、言語の面から、Malory の作家としての成長発達を調べ

ると同時に、彼の英語の構造をも明らかにしたいと思う。

Caxton 版のテキストと Winchester MS. のテキストとをくらべてみると、Caxton 本の Book V と、それに対応する Winchester MS. の *The Noble Tale of King Arthur and the Emperor Lucius* (以下、これを *Arthur and Lucius* と略称する) とが特にいちじるしい相違を示していることがわかる。長さの点だけでも前者は後者の半分ぐらいしかない。さらに Vinaver 教授によつて、この作品 *Arthur and Lucius* が Malory の処女作であり、かつこれはフランス語のロマンスの翻訳や翻案ではなくて、14 世紀後半の North-West Midland 方言の頭韻詩 *Morte Arthure* を 15 世紀の読者に向くように焼き直したものであることが明らかにされた。⁽⁴⁾ 「Caxton がみたとすれば、この詩の言語などは、田舎なまりで、凝りすぎて、日常の言葉とあまりにもちがう。まつたく使いものにならぬ言葉であつたろう。ところが Malory の方は Warwickshire の人だから、*Morte Arthure* の言語も、さほど難解とは思わなかつたらしい。それどころか、大いに良い文章だと思つたらしく、*Morte Arthure* の言語や文体の特色をさかんに取り入れた散文を書いた。Winchester MS. の *Arthur and Lucius* にそれが表われている。⁽⁵⁾」

単なる印刷屋ではなく、王侯貴族を、日ざす読者とした出版業者でもあり編集者でもあつた Caxton が、Malory の原作を忠実に保存している *Arthur and Lucius* に大改訂を加えなければならなかつたのはこういう言語や文体のためであつたのだ、と厨川先生はお考えになつた。そして『英文学研究』第 34 巻第 2 号に発表された「Malory の ‘Arthur and Lucius’ の言語について」という論文の中で、*Arthur and Lucius* の Winchester MS. の言語の地方的特色を調べ、さらに Caxton 本の Malory のそれとを比較して、Winchester MS. でひんばんに使用されている Northern 方言の形態が、Caxton 本の方では完全に削除されていたり、あるいは「日常使われている普通のことば (the comyn termes that be dayli vsed)」⁽⁶⁾ で置き換えられたりしていることを明らかにされた。

拙稿では、第一に、厨川先生の論文とまつたく同じ記述の方法で、言いかえれば synchronique な方法で、Malory の最終作 *The Most Piteous Tale of the Morte Arthur Saunz Gwerdon* (ここでは、これを *The Tale of the Morte Arthur* と略称する) の Winchester MS. の言語を調査する。次には、diachronique な見地から、以上の研究で得られた結果を、厨川先生の研究の結論と比較することによつて、Malory の言語の成長発達のプロセスを調べる。

Winchester MS. の *The Tale of the Morte Arthur* と、それに対応する Caxton 本の Books XX-XXI との間には、*Arthur and Lucius* と Book V との間にみられたようないぢるしい相違は認められない。このことは、Caxton が、Malory の原作を *The Tale of the Morte Arthur* の場合には、あまり改訂しなかつたことを意味しているように思われる。ではなぜ *The Tale of the Morte Arthur* の場合には、Caxton は *Arthur and Lucius* の時のように改訂の大なたをふるわなかつたのであろうか。作家としての Malory が大きく成長し、最終作を書いた時には、その言語や文体も Caxton がみても不適當でない程に洗練されたものに成長発達していたからに違いない。そこで、*The Tale of the Morte Arthur* の Winchester MS. の言語においては、地方言的特色が大いに薄れ、それに反比例して標準英語としての特色が濃厚になつていのではないかと推定される。

註

- (1) Eugène Vinaver (ed.), *The Works of Sir Thomas Malory*, 3 vols., Oxford, 1947; reprinted with corrections, 1948.
- (2) 'separate romances' が 8 篇から成るといふ点に関しては、Vinaver (ed.), Vol. I, Introduction, pp. xxix-xxxv を参照。
- (3) くわしくは次の論文を参照。厨川文夫「Malory の 'Arthur and Lucius' の言語について」(『英文学研究』第 34 卷第 2 号〔昭和 33 年 3 月〕) pp. 253-69, pp. 254-5.
- (4) Vinaver (ed.), Vol. I, Introduction, pp. xxxv-xlvi.
- (5) 前掲「Malory の 'Arthur and Lucius' の言語について」, pp. 256-7.
- (6) *Caxton's Eneydos, 1490*, edited by M. T. Culley and F. J. Furnivall (EETS. ES. LVII), London, 1890; p. 3.

II

本節で明らかにされるであろう事項を挙げると次のようになる。(1) Malory の最終作 *The Tale of the Morte Arthur* の Winchester MS. の言語の地方言的特色を調べ、Caxton 本の Books XX-XXI のそれと比較することによつて、Malory が最終作で用いた言語と当時の標準英語との関係、(2) *The Tale of the Morte Arthur* の言語の地方言的特色と、*Arthur and Lucius* のそれとを比較することによつて、Malory 自身の言語が如何に成長発達していつたかという様子。以上の 2 点を問題点として考察を進める。Caxton 本の場合には、H. Oskar Sommer 翻刻

のテキストを用い、Winchester MS. の場合には、Eugène Vinaver 校訂のテキストを使用する。なお本節では (A) Spelling と (B) Accidence のみを調べる。

LIST OF ABBREVIATIONS.

Baldwin. Charles Sears Baldwin, *The Inflections and Syntax of the 'Morte d'Arthur' of Sir Thomas Malory: A Study in Fifteenth-Century English*, Boston, 1894.

C. Caxton's "*Morte Darthur*", Book XX, Chs. i-xxii and Book XXI, Chs. i-ix. Cf. Sommer (ed.). すべて C からの引用には Sommer (ed.) のページ数と行数とを示す。例えば 797/5=Sommer, p. 797, l. 5.

厨川. 厨川文夫「Malory の 'Arthur and Lucius' の言語について」『英文学研究』第 34 巻第 2 号 (昭和 33 年 3 月), pp. 253-69.

ME. Middle English.

OE. Old English.

PE. Present-day English.

Sommer (ed.). H. Oskar Sommer (ed.), *Le Morte Darthur by Syr Thomas Malory: The Original Edition of William Caxton Now Reprinted and Edited with an Introduction and Glossary*, 3 vols., London, 1889-1891.

Vinaver (ed.). Eugène Vinaver (ed.), *The Works of Sir Thomas Malory* (3 vols., Oxford, 1947; reprinted with corrections, 1948), III, pp. 1161-1253.

W. The Winchester MS., ff 449^r-484^r (*The Tale of the Morte Arthur*). Cf. Vinaver (ed.). すべて W からの引用には Vinaver (ed.) のページ数と行数とを示す。例えば, 1162/5=Vinaver, p. 1162, l. 5.

(A) SPELLING.

Spelling では、ME の unstressed syllables の e の扱い方だけについて、W と C とを比較する。unstressed syllables 中の e を、i あるいは y と書くのは本来北方英語の特色であるので、(1) e と書いたものと、(2) i または y と書いたものとを対立させてみる。次の数種の屈折語尾の場合、W と C とでは、e と i (y) との

出現の頻度に差がある。すなわち (1) Nouns の Pl.; (2) Adjectives の comparative と superlative; (3) Verbs の Pres. Ind. 2 Sg.; (4) Pres. Ind. 3 Sg.; (5) Pres. Ind Pl.; (6) Weak Verbs の Pret. と Pret. Ptc.; (7) Strong Verbs の Pret. Ptc.—W の最初の部分 pp. 1161-65 と最後の部分 pp. 1249-53, ならびにそれに対応する C の Book XX, Chs. i-ii と Book XXI, Chs. viii-ix を調査した結果を記す。

(1) Nouns の Pl.—W では -es が 31 例 (floures 1161/4; kynges 1162/5; knyghtes 1164/1; wordes 1249/22; barownes 1251/9; etc.), -is, -ys が 24 例 (kyngis 1251/8; knyghtis 1161/9; wordis 1162/21; clothys 1249/2; hondys 1249/13; etc.)。そのほか, -s が 3 例 (maters 1161/26; well-wyllers 1164/17; prayers 1251/7), 語尾のないものが 3 例 (score 1162/16; pounce 1251/2, 1251/3), Mutation Pl. が 6 例 (men 1161/5, 1250/10; women 1161/5; kynnesmen 1249/11; jantyllwomen 1251/33; jantillwomen 1252/2), 語幹母音が mutate し, さらに弱変化語尾を取るものが 2 例 (brethirn 1161/11; brethirne 1161/15), irregular な -s 語尾を取るものが 1 例 (pence 1250/28 < *sing.* penny) ある。結局 Pl. の合計 70 例のうち, -is, -ys が 24 例であるから, 約 34.3% が -is, -ys であるということになる。

C では -es が 48 例 (floures 797/5; dedes 798/11; cokes 799/15; clothes 851/36; shyppes 853/31; etc.), -ys はわずか 2 例 (preestys 853/15; clerkys 853/16)。そのほか, -s が 6 例 (maters 797/24; well willers 799/34; syrs 853/6; pens 853/12 (W では pence になっていた); prayers 853/21; barons 853/23), 語尾のないものが 3 例 (score 798/10; pounce 853/18, 853/19), Mutation Pl. が 4 例 (kynnesmen 852/9; men 851/36; lentyl wymmen 854/4, 854/6), 語幹母音が mutate し, さらに弱変化語尾を取るものが 3 例 (bretheren 797/11, 797/16, 799/34) ある。つまり Pl. の総数のうち -ys は約 3.0% ⁽¹⁾ になる。

これを先の W における -is (-ys) の使用率 34.3% とくらべてみると, W の方が Nouns の Pl. に圧倒的多数の -is (-ys) を使用しているという事実が明らかになる。これは, *Arthur and Lucius* について「Wの方が Nouns の Pl. に -ys (-is) を多く使っている。Wの方がCよりも, Maloryの原作を忠実に保存していると見られるから, Maloryが Nouns の Pl. に -ys (-is) と書いたのを, Caxtonが -esに訂正したのが多いのではないかと考えられる」という厨川先生の結論(厨川(A))

D) と一致するようだ。なお注目すべきところは、*Arthur and Lucius* における -is (-ys) の使用率は約 23.5% であつたから、最終作における使用率の方が遙かに高いという点である。

(2) Adjectives の cpv., spl. の語尾。—W では cpv. が 4 例 (bettir 1162/10; lenger 1162/20, 1163/4, 1163/8), spl. は 2 例 (hevyest 1250/18; nobelest 1252/9) 現われる。合計 6 例中、e のかわりに i を用いた例は bettir だけに見られる。C ではこの語が better (798/4) になつている。あとはすべて W のものと同形。W と C のいずれにも lenger という母音変化の比較級が現われていることは興味がある。

(3) Verbs の Pres. Ind. 2 Sg. —W の pp. 1161-65 ならびに pp. 1249-53 には例なし。後段 *Accidence* の (1) 項を参照。

(4) Pres. Ind. 3 Sg. —全部で 13 例。i (y) と e の割合は 12 対 1 になつている (holdith 1163/7; bryngith 1163/17; drawith 1163/28; waytith 1164/23; repentith 1249/13; stondith 1252/5; pleasith 1253/10; floryshyth 1161/1; burgenyth 1161/1; causyth 1161/5; methynkis 1162/17; repentis 1164/32: cf. lyeth 1161/20)。他方 C では、i (y) : e は 0 : 13 になつている。なお W で -is を用いている所が、C ではそれぞれ -eth になつている (me thynketh 798/11; repenteth 800/8)。後段 *Accidence* の (2) 項を参照。

(5) Pres. Ind. Pl. —2 例 (rejoysyth 1161/3; gladith 1161/3)。対応する語は、C でそれぞれ reioycen (797/3), gladen (797/4) となつている。

(6) Weak Pret. および Pret. Ptc. —W では Pret. は 22 例が全部 -ed。それに反して、C では Pret. 29 例中 6 例が -yd (passyd 852/33; knelyd 853/9; offeryd 853/17, 853/18; callyd 853/22, 854/6)。Weak Pret. Ptc. でも同様で、W では 16 例全部が -ed、他方 C では -ed の 15 例に対して -yd が 3 例ある (disparplyd 798/24; remembryd 798/12; blessyd 854/16)。ここにも、*Arthur and Lucius* について下された「W における他の場合に i (y) の形が多いのと、まさしく逆である」(厨川 (A) 6) という結論が適用できる。

(7) Strong Verbs の Pret. Ptc. —6 例とも全部 -yn (knowyn 1161/29; takyn 1163/16, 1163/19, 1253/4; gotyn 1250/33; forsakyn 1253/14)。C では全部が -en になつている。

(8) その他。—chambir (1161/16, etc.), opynly (1161/17), suffird (1161/

22), *suffir* (1161/22, etc.), *brothir* (1161/25, etc.), *remembir* (1162/7), *remem-
birde* (1162/18), *nothir* (1162/25), *othir* (1163/13, etc.), *ellis* (1164/16), *syththyn*
(1164/35), *fadir* (1249/7), *lettir* (1249/20), *numbir* (1250/8), *offird(e)* (1251/1,
etc.), *westirly* (1251/29), *inowghe* (1251/33), *yondir* (1252/4 に 2 回), *hyddir*
(1252/5), *togydir* (1252/10), *Goddis* (1252/13, etc.), *aftir* (1252/14). W に現わ
れたこれら i (y) の形は, C では大抵 e になっている。——*chamber* (797/16, etc.),
openly (797/17), *broder* (797/23), *other* (798/35, etc.), *sythen* (800/11), *fader*
(852/5), *letter* (852/12), *westerly* (854/1), *yonder* (854/8), *yender* (854/8), *to
gyder* (854/13), *goddes* (854/15), *after* (854/15).

(B) ACCIDENCE.

Spelling の場合には, 最初の部分 (=W, pp. 1161-65) と最後の部分 (=W, pp. 1249-53) のみをしらべたが, *Accidence* については, *The Tale of the Morte Arthur* 全部 (=W, pp. 1161-1253) をしらべる。研究の対象としてえらんだ形態は次の 9 種である。——(1) *Pres. Ind. 2 Sg.*; (2) *Pres. Ind. 3 Sg.*; (3) *Pres. Ind. Pl.*; (4) *Pres. Ptc.*; (5) *Strong Verbs* の *Pret. Ptc.*; (6) *Infinitive*; (7) *Fem. Pron. Nom. Sg.*; (8) *3rd Pers. Pron. Nom. Gen. Dat.-Acc. Pl.*; (9) *The Plural of the Verb "to be"*。これらを調べることにより, W の形態に現われた ME の地方的特色を明らかにすることができる。

(1) *Pres. Ind. 2 Sg.*——W では *-est(e)* が 3 例 (*lyest* 1189/22; *lyghest* 1230/12; *syeste* 1239/2), *-yst(e)* が 5 例 (*menyst* 1190/6; *enbraydyst* 1190/12; *holdyst* 1215/12; *wythdrawyst* 1217/33; *commyste* 1238/34) 現われている。ME の Northern や N. Midland 方言の形態とされる *-is (-ys)* は一度も使用されていない。これに対し C ではすべてが *-est* になっている (*lyest* 817/7; *lyggest* 841/26; *seest* 848/24; *menest* 817/19; *enbraydest* 817/25; *hydest* 834/1; *withdrawest* 836/8; *comest* 848/22)。要するに *Pres. Ind. 2 Sg.* については, i(y) と e の対照を除けば, W と C とはほとんど変わらないといえる (本稿 Spelling の項参照)。

一方, W の *Arthur and Lucius* では *-est(e)* のかわり, *-yst(e)* もしばしば使われていたが, 重要な点は *-is (-ys)* が時々現われていた点である (厨川 (B) I)。

そこで *Arthur and Lucius* と *The Tale of the Morte Arthur* とをくらべてみると、処女作と推定される作品では時々使用されていた地方言の形態が、最終作では一度も用いられていないという事実が明らかになる。これは注目すべきことである。

(2) Pres. Ind. 3 Sg.——この場合も、i(y) と e との相違を除けば、W と C とはほとんど変わらない。W では -th 形 (-ith, -yth, -eth(e), -th(e)) が普通、-s 形 (-is, -ys, -es, -s) は稀。-th 形グループの内訳を示すと、-ith (-yth) の 49 例に対して、-eth(e) が 5 例 (lyeth 1161/20; boteneth 1189/16, 1189/27; applyeth 1204/10; lyethe 1241/21), -th(e) に contract したものが 8 例 (seyth 1163/20, 1165/10, 1178/14, 1190/17, 1194/15, 1217/13; sayth 1177/34; saythe 1220/11: cf. OE. sægþ) になる。動詞 say の Pres. Ind. 3 Sg. の形は contract したものしかない。-s 形グループでは、-is (-ys) の 7 例 (methynkis 1162/17; repentis 1164/32, 1176/2, 1201/12, 1219/5; thynkis 1172/14; worchys 1238/11) に対して、-es と -s はそれぞれ 1 例しか現われていない (repentes 1189/26; betokyns 1237/21)。これに対し、C でも -th 形 (-eth, -th) が普通、-s 形 (-es, -ys) はわずかに 3 例しか現われていない。-th の系統の形の中では、W で -th に contract した語尾を持つ語に対応する語が、それぞれ C でも -th 語尾を取つているほかは全部 -eth である。言いかえれば、C に現われる -th の 8 例は全部動詞 say の Pres. Ind. 3 Sg. の形で、他の語はすべて -eth の語尾を取つているということである。-s の系統の形 3 例の内訳を示すと、Book XX に -ys が 1 例 (repentys 836/38), Book XXI に -es が 2 例 (bytokenes 847/23; werches 848/1) となる。なお Baldwin は *Le Morte Darthur* の Pres. Ind. 3 Sg. の語尾 -es, -ys について次のように述べている: “Third sing. -es is very rare: bytokenes, 847. 23; werches, 848.1. The only case of -ys is repentys, 836. 38.” (Baldwin, p. 54, n. 4)。これらの語はいずれも W の -s グループの語に対応するものであることは注意を要する。——要するに Pres. Ind. 3 Sg. の形で注目すべきところは、W では -ith (-yth) が普通であるが、C では -eth が普通な形になつている点ぐらいなものにすぎない (本稿 Spelling の項参照)。

一方、W の *Arthur and Lucius* では -ys (-is) が普通; -yth (-ith) も屢々使用されていた (厨川 (B) 2)。つまり *The Tale of the Morte Arthur* においては -ys (-is) 形が激減していることになる。-ys (-is), -es は、ME の Northern および N. Midland 方言の形、-yth (-ith), -eth は Southern および S. Midland

の形とされるものである。従つて、Malory は、彼の処女作と推定される作品では、Northern および N. Midland の形と、Southern および S. Midland の形とを、まぜて使つていたが、最終作ではもつぱら Southern および S. Midland の形を使うようになった、といえる。

(3) Pres. Ind. Pl.—W では -yth (-ith) も 7 例ほど見出されるが (rejoysyth 1161/3; gladith 1161/3; lovyth 1169/32; drawyth 1186/16; forberyth 1192/24; causyth 1199/16; stondyth 1235/15), -e (全部で 29 例) および -e の脱落した形 (全部で 17 例) の方が普通。Full form の -en は一回も使用されていない。-is (-ys) は一度も現われない。-e の脱落した形合計 17 例の内訳は、9 例が say (1163/18, etc.), 5 例が know (1161/21, etc.), あとはそれぞれ se (1193/19), pray (1193/21), suffir (1211/19)。動詞 say, know の 2 語は、Pres. Ind. Pl. では常にこの形を取つて現われる。これに対して C では、-e が普通であり、-e のない形は 5 回しか使用されていない。この 5 例はすべて say (806/24, etc.)。-en 語尾を取つているものは 3 例ある (reioycen 797/3; gladen 797/4; causen 825/12)。このほかに注目すべきことは、-eth が 3 例現われることである：—moche peple draweth (814/17-18); ye nor none of yours forbereth (819/26-27); alle that euer before you stondesth (845/26-27)。Pres. Ind. Pl. の語尾 -(e)th について、Baldwin は、*Le Morte Darthur* 全篇を通じて、わずか 4 例しかないといつて、次の例を引用している (loveth 47/13; goth 629/9; longeth 858/20; redeth 861/4)。cf. Baldwin, § 179。上記 3 例文中、第 1 例、第 2 例では、直ちにこれを複数形と考えることは問題があるにせよ、Baldwin のこの部分は訂正を要するようだ。—ME では、大ざつぱに言えば Northern が -es; Midlands が -en; Southern が -eth であつた。ただし W の -yth は、Southern というよりは、West Midland の形と見た方がよい。⁽²⁾従つて、Pres. Ind. Pl. については、W, C のいずれにおいても、Midlands 系の形が主として使われている、ということになる。

W の *Arthur and Lucius* では「よく使われている形は -is, -ys; -yth である。そのほかに -es, -s; -eth; -yn, -e があるが、少ない」(厨川 (B) 3)。すなわち *Arthur and Lucius* では、ME Northern 系の形が West Midland 系の形と併用されていたわけである。つまり Pres. Ind. Pl. の場合にも、Malory の言語は大きく変化したのだと解釈できる。

(4) Pres. Ptc.—W ではすべての Pres. Ptc. が -yng(e) に終つている。

-ye に終る Inf. を有する動詞の場合でも同様で -yng(e) となる：—cryyng (1165/16, 1167/30, 1237/10); cryynge (1214/22) : cf. criyng (1185/13); saiyng (1192/32); liynge (1230/5). そのほかには、PE の語尾 -ing が一回 saying (1237/10) に現われており、contract した Pres. Ptc. が一例使われている (praynge 1249/21)。Northern の形 -and(e) は一度も使用されていない。これに対して C でも -yng(e) が普通に用いられているが、-ye に終る Inf. を有する動詞の場合には -eng(e) となつている。-eng(e) の例：—cryenge (800/25, etc.); lyenge (841/21); prayeng (852/18)。

W の *Arthur and Lucius* では -yng(e) が普通。-ye に終る Inf. の場合は C と同様 -eng(e) になつている。しかし重要なことは *Arthur and Lucius* には Northern の形 -and(e) が 6 回現われていることである (厨川 (B) 4)。

要するに、*The Tale of the Morte Arthur* は、Northern 方言の形を用いていないという点では、Caxton 版のテキストと同じであるが、Spelling の点では、興味のあることに、同じ Winchester MS. の *Arthur and Lucius* と同 Caxton 本とも違つている。もつとも Winchester MS. は 2 人の写字生によつて筆写されたものであり、*Arthur and Lucius* の担当者とは別人であつたから、この Spelling の相違は、これら 2 人の写字生の spelling habit の違いによるのかもしれない (cf. Vinaver (ed.), Vol. I, Introduction, p. lxxxvii, n. 5)。

(5) Strong Verbs の Pret. Ptc.—W には、-yn が 43 例、-en が 21 例、-en の n が落ちたものが 6 例 (begunne 1230/27; founde 1174/34, 1178/3, 1230/5; stonde 1184/24; stonge 1235/22)、語尾のないものが 21 例ある。語尾のない Pret. Ptc. 21 例の内訳は、18 例が com (1165/30, etc.); 2 例が becom (1236/17, 1250/11); 1 例が won (1237/1)⁽⁴⁾。そのほかには、-n(e) に終る contracted Ptc. が 66 例ある。うち 50 例は slayne (1161/8, etc.)⁽⁵⁾。その他の -n(e) に終る Pret. Ptc. の例：—born (1249/23, 1249/24); borne (1214/29, 1215/2, 1217/8); forborne (1215/35, 1216/17); layne (1187/33); sene (1168/7, 1218/20, 1232/19); seyne (1189/21, 1196/35, 1235/30, 1238/7); upborne (1203/33)。一方 C では -en が普通で、-yn は 1 回しか用いられていない (groundyn 807/18)⁽⁶⁾。動詞 wryte は次の場所で wryton になつている：—850/35, 851/16, 851/22⁽⁶⁾。C では -en の n がしばしば脱落するが、この -e に終る Pret. Ptc. の大部分は、W の -e Pret. Ptc.

か語尾のない **Pret. Ptc.** に対応するものである。語尾のない **Pret. Ptc.** は 813/2 に 1 回だけ現われている (**stand**)。この語は W では **stonde** になっている (1184/24)。-n(e) に終る **contracted Ptc.** は、W の -n(e) **Ptc.** に対応する語に限られており、W とほぼ同数ある：—**borne** (W 1214/29, etc. : C 833/26, etc.) ; **forborne** (W 1215/35, etc. : C 834/21, etc.) ; **layne** (W 1187/33 : C 815/23) ; **sene** (W 1232/19, etc. : C 843/10, etc.) ; **slayn(e)** (W 1165/33, etc. : C 801/5, etc.) ; **upborne** (W 1203/33 : C vp borne 829/4)。C には PE と同形態の **seen** も用いられている (846/5, 847/32)。Baldwin は **sene** のみを挙げて、この形を例示していない。cf. Baldwin, §§ 149, 161。Prefix i- (y-) (<OE. ge-) は、W, C のいずれに於ても、**Strong Verbs** の **Pret. Ptc.** にはつかない。—要するに **Pret. Ptc.** の形で注目すべきところは、W ではいぜん -yn が -en の約 2 倍ぐらい多く用いられているが、C では -en が普通な形となつている点ぐらいなものにすぎない (本稿 **Spelling** の項参照)。

W の *Arthur and Lucius* では -yn が普通で、-en は稀 (厨川 (B) 5)。

(6) **Infinitive**.—W には (i) -e に終るものと、(ii) -e のないものがある。例を少し挙げる。(i) の例: **abyde** (1186/14) ; **beholde** (1161/2) ; **cause** (1183/27) ; **deffende** (1215/18) ; **excuse** (1189/16) ; **falle** (1176/4) ; **greve** (1238/31) ; **helpe** (1169/22) ; **jouge** (1173/5) ; **kepe** (1173/6) ; **lyve** (1166/24) ; **make** (1197/9) ; **nyghe** (1216/19) ; **overrenne** (1211/14) ; **perfourme** (1200/1) ; **repose** (1193/1) ; **speke** (1164/19) ; **turne** (1213/15) ; **undirstonde** (1203/21) ; **warre** (1211/5)。(ii) の例: **assay** (1186/18) ; **blow** (1190/21) ; **cherysh** (1188/18) ; **discover** (1227/13) ; **encres** (1220/6) ; **fyght** (1216/4) ; **gadir** (1169/31) ; **handyll** (1211/22) ; **issey** (1187/13) ; **know** (1195/25) ; **ley** (1186/29) ; **macch** (1163/18) ; **offir** (1199/28) ; **pray** (1241/26) ; **rescow** (1234/18) ; **say** (1251/17) ; **throw** (1239/1) ; **wyn** (1198/19)。

C でも (i) -e に終るものと、(ii) -e のないものがある。(i) の例: **amende** (854/24) ; **brynge** (799/17) ; **commaunde** (810/13) ; **destroye** (806/34) ; **forgyue** (826/7) ; **kepe** (798/27) ; **reunge** (820/6) ; **suffre** (797/21) ; **take** (804/6) ; **wrathe** (800/9)。(ii) の例: **couer** (800/31) ; **forth** (853/37) ; **hold** (797/36) ; **say** (798/20) ; **suffer** (832/8) ; **trust** (822/10)。しかしながら、(i) の -e に終る **Inf.** の、(ii) の -e のない **Inf.** に対する割合は、W と C とでは違つている。

Spelling の項で調べた部分と同一の部分について調べた結果を記すと、Wでは64.5%が -e に終る Inf. であり、一方 C では 83.5% の Inf. が -e に終っている。

W の *Arthur and Lucius* にも、(i) -e に終るものと、(ii) -e のないものがある(厨川(B)6)。

(7) Fem. Pron. Nom. Sg.—W では、*The Tale of the Morte Arthur* の範囲ではただ1例の he (=“she”)を除き、他は全部 she。この older Pronoun は次の場面に現われている：—So sir Launcelot sente forthe a damesel wyth a dwarff with her…And so he starte uppon a palferey, and a dwarffe ran by her syde, and whan she cam to the pavelon of kynge Arthur, there she alyght (1212/26-31)。*Arthur and Lucius* では一度も使用されていなかった he (=“she”)が(厨川(B)7)、最終作に現われていることは興味がある。しかも、she と一緒に、同一文中に併用されていることは、C では she のみ。従つて上記 W の ‘he’ は、C においては、Caxton によつて ‘she’ に変えられている(832/1)。

(8) 3rd Pers. Pron. Nom. Gen. Dat.-Acc. Pl.—W では、Nom. は they のみ(1161/13, etc.); Gen. は their (1164/10, etc.), her (1176/2, etc.); Dat.-Acc. は them (1163/1, etc.), hem (1169/1, etc.) である。Gen. では their が普通で、her はわずかに2例しかなく、1176/2 と 1201/18 に現われている。一方 Dat.-Acc. においては、hem の them に対する頻度は、Gen. の her の their に対する頻度よりもずっと高い。them の 57 例に対して hem は 34 例もある。them と hem とは全く無差別に用いられ、同一文中に僅かの間をおいて両方の形が現われる例もある：—they within kepte them oute of the towne and bete hem myghtly frome the wallis (1214/18-19); there sholde no man nyghe hem other deale wyth them (1216/18-19)。さらに、Dat. には hem を用い、Acc. には them を用いる、という区別も存在しない：—and than lat us freysshly set uppon them and shrede hem downe as shepe in a folde (1211/26-27) / Arthur had…gyffyn them londis (1229/4-5); God hath gyvyn hem that grace (1234/4) / Sir Launcelot slew hem both (1184/33); sir Launcelot slew them (1185/33)。

C では、Nom. が they; Gen. が their(e), theyr(e), theyir (805/15に一回), her; Dat.-Acc. が them, theym (3例 845/8, 847/29, 839/26), hem, hym (817/5

に一回)がある。Baldwin (p. 17) は *theyir* と *hym* を挙げていない。斜格では、Cの方がWより *variants* を多く持つていることがわかる。Gen. では *th-* 形の方が圧倒的に多く用いられており、*her* は2例しかない：—*but the knyghtes were soo stronge & theyr sperys so bygge that their horses myȝt not endure her buffettes & so their horses fyl to therthe & than they auoyded their horses & dressyd her sheldes afore them* (835/5-8). しかし Dat.-Acc. においては、*h-* 形が *th-* 形と同じ位の頻度で使用されている。Cでも、Wと同様、*th-* の形が Acc. で、*h-* の形が Dat. だという区別はない：—*bothe the hoostes were assembled of hem wythoute and of them wythin* (837/15-16) / *syr launcelot…suffred kyng Arthurs party for to withdrawe them on syde. And thenne sir launcelots party withdrewe hem in to his Castel* (820/30-32) / *I gaf hem warnynge* (809/22) ; *he…asked them what they wold do* (828/8-9) / *Launcelot slewe hem bothe* (813/9) ; *sire launcelot slewe them bothe* (814/2). *hym*(=“*them*”) は次の場面に現われている：—*allas that euer I was so vnhappy sayd laūncelot þt I had not sene syr Gareth and sir Gaherys. Thow lyst recreaunt knyght sayd sir Gawayne thow slewest hym in despyte of me* (817/3-6). この語はWでは *hem* になっている：—‘*Thou lyst, recrayed knyght,*’ *seyde sir Gawayne, ‘thou slewyste hem in the despite of me…’* (1189/22-23). Cの‘*hym*’はミスプリントかもしれない。

次にWとCとをくらべてみると、Wで用いられている *h-* の形が、Cで *th-* の形になつていたり、反対にWの *th-* の形がCで *h-* の形になつていたりしている例がある。Gen. の例：—*her royalté* (W 1201/18) : *their Royalte* (C 827/5) / *their buffettis* (W 1216/26) : *her buffettes* (C 835/6-7) / *their shyldis* (W 1216/28) : *her sheldes* (C 835/8). Dat.-Acc. の例：—*they made hem redy* (W 1250/5) : *them redy* (C 852/31-32) / *bothe partyes were charged to holde hem styll* (W 1219/24-25) : *them styll* (C 837/18) / *sir Launcelot saw them nat* (W 1178/2) : *hem not* (C 811/11) / *he smote them* (W 1183/24-25) : *hem* (C 812/14).

H. C. Wyld は、Caxton 版の *Le Morte Darthur* について、‘*Malory* (1469) has *they* in Nom., *theym*, *them* in Acc., *hem* in Dat.’⁽⁷⁾ と言っているが、上の

調査で明らかになつたように、CにもWにもWyldの言うような区別は存在しない。*Arthur and Lucius*にもthemがAcc.でhemがDat.だという区別はない(厨川(B)8)。従つて、「Malory(1469)はAcc.にtheym, themをDat.にhemを使つている」ということはできないことになる。

(9) The Plural of the Verb “to be.”—Wには, arが20例(1163/10, etc.); beが13例(1161/19, etc.), benが5例(1169/9, 1170/5, 1212/6, 1213/23, 1237/1), beneが4例(1212/4, 1213/6, 1233/32, 1242/4)ある。注意すべきことは, Northern方言のis(=“are”)が一回現われることである:—many adventures that is lyke to falle (1176/26-27)。このprovincialismは, Cで次の様に変えられている:—many aduentures the whiche ben lyke there to falle (810/9-10)。これに対してCでは, ar(e)とbe(n)が用いられている。WのarがCではbe(n)になつていたり, 反対にCのar(e)がWでbe(n)になつていたりする例は見出せない。ただし, WのbeがCではbenになつていような例はある(W 1165/31; C 801/2; W 1165/32; C 801/3; W 183/9; C 812/1; W 1203/15; C 828/25)。

Wの*Arthur and Lucius*ではbe, bene; ar(厨川(B)9)。

(Accidence 終り。)

註

- (1) Caxton版の*Le Morte Darthur*の内部でも, Bookによつて-ys(-is)の使用率は異なつてゐる。Baldwin(§3)によれば, Book XXIでは5%, Book XXの分は百分率は示されていないが, -ys(-is) Pl.の例が全部で6例挙げられている。
- (2) 厨川「Maloryの‘Arthur and Lucius’の言語について」, p. 264.
- (3) Cにはこの形はない, Cに現われているPret. Ptc.の形はcome(n)。cf. Baldwin, §§ 147, 161.
- (4) Cにはこの形はない, Cに現われているPret. Ptc.の形はwonne(n)。cf. Baldwin, §§ 141, 161.
- (5) この語がこれ程高い頻度で使用されているということは, *The Tale of the Morte Arthur*の悲痛な世界を象徴しているように思われる。
- (6) Baldwinの次の言葉を参照: “For -en of the preterit participle -yn appears as a rare variant: comyn, 35.9; holdyn, 44.22; betyn, 228.3; groundyn, 807.18. The verb wryte makes a participle wryton at 850.35 and 851.22” (Baldwin, § 188)。851ページの16行目にあるwrytonが見落されている。

- (7) H. C. Wyld, *A Short History of English* (3rd ed., reprinted, London, 1951), p. 235.

III

前節の研究によつて、Winchester MS. の最終作 *The Tale of the Morte Arthur* における Malory の英語では、われわれが期待していたように、処女作と推定される *Arthur and Lucius* に顕著だった ME Northern 方言の形態が殆ど姿を消しており、それに代わつて Midlands 系の形態が主として使用されていることが明らかになつた。この事実には W と C との間にいちじるしい相違は認められず、両者の言語が殆ど一致していることによつても実証された。これに対して Spelling の点では、Winchester MS. は最終作に至つてもいぜん unstressed syllables の e を i または y と書くことが多い。⁽¹⁾ この spelling habit は、しかしながら、Winchester MS. の写字生の好みによるものか、⁽²⁾ Malory の原稿の綴字法に帰せられるものであるか、容易に結論を下すことはできない。

Warwickshire の片田舎に生れ、海のかなたの同時代人 François Villon はだしのしれ者だった Malory が、第一作を書いた時は、方言丸だしの英語を使つた。ところが最終作を書く時に素材として用いた英語は、対応する Caxton 本の英語との一致によつて証明されたように、概してロンドンで「日常使われている普通のことば」であつた。この括弧内の言葉は Caxton が *Eneydos* (1490) の Prologue の中で、彼が *Eneydos* を訳す時に用いた言語について語つた有名な一節にある言葉で、⁽³⁾ Malory はこれに応じたものを用いたことになる。

Malory がこのように自分の linguistic habit を変えたということは、作品の素材として用いる言語としては、自分の方言よりロンドンの方言の方がすぐれている、従つて模倣するに値する、模倣した方が有利であると考えたからに違いない。しかしこう悟つたからといつて、翻然悔悟、心機一転、たちまちにして自己の linguistic habit を変更するわけにはいかない。8 篇のロマンスを 1 篇ずつ調査すれば、その過程も自から明らかになるに相違ないが、この問題は今後の研究にまたねばならない。

最後に——といつて決して最少にではないが——以上の研究によつて明らかにされた Malory のことばに対する態度は、15 世紀の半ばごろすでにロンドンの方言は標準英語としての prestige を獲得していたといふことの lateral evidence にもなる。⁽⁴⁾

註

- (1) “From the 13th century on, first in Northern English, then in the other dialects, we find *i* or *y* instead of *e* in final syllables before a consonant.” (F. Mossé, *A Handbook of Middle English*, translated by J. A. Walker, Baltimore, 1952; p. 34, Remark).
- (2) Vinaver(ed.), Vol. I, Introduction, p. cvi, ll, 25-31.
- (3) Caxton が *Le Morte Darthur* を出版したのは 1485 年であるが (Caxton の colophon; Sommer (ed.), Vol. I, p. 861), その時目ざした読者, 王侯貴族に対して, 彼がどんな言語を適當と考えていたかは, この Prologue の言葉から推定しても間違いではあるまい。
- (4) 最後の作 *The Tale of the Morte Arthur* が完成したのは, Edward 4 世の治世第 9 年目というから, 1469 年 3 月 4 日と 1470 年 3 月 3 日の間になる (Vinaver (ed.), Vol. I, Introduction, p. xiii)。